

# 音

音楽活動を始めて一〇年、家づくりに携わって一年。音楽家でも建築士でもない素人が、自分なりのこだわりを持ちながらこれまでいくつもの作品をつくりあげ、今度は一つの大きな建物をつくり上げようとしている。そして、リタというNPOに属して四年。そうした趣味的活動が、「まちづくり」の中で行われる作業と近いものがあることがわかってきた。

「建築」「作曲」ともに、細部の組み合わせからひとつの全体（建物や曲）ができあがる。そして、その細部は独立して考えられるのではなく、「建築」では、天井と壁、床の仕上げのバランスや窓の大きさと位置、間取りや周辺環境、「作曲」では、各楽器の編成や音質、各パートのテーマやリズムといったように、複雑な関係性の中で個々の細部が調和したときに初めて、心地よい全体が生まれると同時に、細部一つひとつが、他のものではなく、そうでしかなかった意味が見出される。

正解はない。一〇〇人いれば一〇〇通りの意味のある作品ができあがる。

一つの細部を考えるのに、もう二つ、三つ、もしくは気付いていないだけで、もっと多くの細部が関係してくることが見えてくる。

# 窓

一つとってみても、部屋の中に立っている時、座っている時、寝ている時では、そこから見える景色が異なる。その窓が、どの状態の時にどんな景色をもっとも映し出してほしいのかを考える。そして、その窓の高さが、隣の窓の高さの位置と、デザインとして揃えるのかどうかを考える。通気という機能を持たせるときに、どの方向に開けたらよいのか考える。窓の色はどうするか考える。壁の色や仕上げとのバ

ランスはどうか。

こんな具合に、一つひとつの細部を意味あるものにするためには、それらに関係する細部全てとの確認作業が必要となる。

時には力チツと合わせることも、時にはあえて外してみることも。

そうした作業を丁寧につづつ自分の納得いく形に落とし込んでいくと、流行や上辺だけの表現ではない、そこにあるべき形で存在する、唯一無二の作品となる。

まちづくりも同様に、まちを全体として捉えるならば、隣との関係、家やお店、移動手段など人々の暮らしや活動が細部となる。

まちづくりにおける細部の、多数であり多様である。でも、一人ひとりがそれらとの関係性に対してそれぞれの意味を持つことによって、細部が共鳴し合い、他にはない「自分たちのまち」ができあがる。

まちという作品をつくりあげていくということ、なのかな。

昨今、建築やデザイン、音楽を通じて、社会や地域への問題提起や問題解決に向けて活動する人たちがいる。まさに「意味をもつ作品」を生み出している。

■ 建築 Peter Zumthor

■ 音楽 Sarah Kirsch (formerly Mike Kirsch, r.i.p.)

■ デザイン Kesselkramer

(Y)



※ 配布  
岡崎市図書館交流プラザLibra/岡崎市内の地域交流センター  
会員宛へ郵送 等 ※会員登録をご希望の方は左記までご連絡ください。  
※ 配布協力  
Ragslow/亜cha:la/森の花畑/FMおかざき/松應寺/  
杉くんの駄菓子屋/FURAgallery/angelshare/  
長善館/cafeくらがり/コミュニティ・ユース・バンクmomo/  
三河サドベリースクール・シードーム

※ 発行・編集  
特定非営利活動法人 岡崎まち育てセンター・りた  
〒444-0072 岡崎市六供町字杉本78-1  
TEL (0564)23-2888 / FAX (0564)23-2898  
http://www.okazaki-lita.com / http://www.facebook.com/okazaki.lita

まちのミカタ  
**Litaracy**  
2013.1 vol.61



Litaracy

## 01 余白

「余白」はデザインの大事な要素だ。だから、なくてはならない。しかし、あればいいというものでもない。見る人に心地よさと想像力を生み出せるような

「余白」。この「計画的な余白」を、紙面デザインの際に私は必ず心がけている。

でも「余白」の効果は紙面レイアウトに限ったことではない。人間関係の「余白」。時間の「余白」。

空間の「余白」。生活の様々な場面で「余白」を見方につければ、生き方がもっと豊かになるような気がした。

(F)

## 02 一陽来復

「偽」「変」「新」「暑」「絆」ときて、去年は「金」でした。その年の世相を表す漢字一文字。さて今年はどうな一年に…？

東日本大震災の復興に日本経済の復活、地域の絆の回復と、「復」の一文字の登場はまだかと心待ちです。そういえば、「日本を、取り戻す」をスローガンに掲げて政権も変わりました。さてどうなることか…？

世相は「福」を呼ぶ「復」であることを期待しつつ、一方で自分の為すべきことをしっかりやる一年にしたいと心新たに新年を迎えています。皆様におかれましても、どうか幸多き一年でありますように。

(K)

## 03 お互い様組織

「ビジョンの共有」「合意形成」「コーディネーター」「ファシリテーター」

こうした言葉は、強制的で知的なものに感じてしまうときがある。

商店街のメンバー間や組織の内部会議、思いのある人たちの集まりの中で、取りまとめる的なことが必要とされているかもしれないけど、もっとお互いに参加しやすい関係にある自由度と自主性の高い集まりでいいのではないかなど。

今ご時世、100人中100人が「〇」を出すものなんてない。

希望も要望も不満も多様化している中で、「みんなの賛成・合意がなければできない」

のではなく「とりあえず、それぞれが受け入れて、場合によっては応援するからやってみることができる」、そんな雰囲気を集まりを最近好んでいる。

「それはやらない方がいいじゃない」「こちらの考えと違うからそれはダメだ」といって逆には、逆に自分が始めようとするときに何も始められない。

迷惑をかけ合わない組織から迷惑をかけ合う「お互いさまの組織」っていうのはどうなんでしょう。

(Y)

## 04 樹の声を聴く

巨木をみるといつも思うことがある。

これだけ大きくなるのに、どれだけの時間がかかったのだろう、何十年、何百年と同じところに立ち、どれだけのものを見てきたのだろうか。

ぼくは巨木を見たら必ず根元に座ってボーっとする。

そうすることで、この樹がどんな景色を見てきたのか、昔の人がこの木の下でどんなことをしていたのかを想像する。

残念なことに「樹の声が聴こえる」とか、そんな特殊能力は持っていないが、もし急にそんな能力に目覚めたらどうしようかと1mmも役に立た

ないことを考えてみたりするのが好きだ。

困ったことに人は簡単に樹を切ってしまう。薬剤を注射してわざと枯らす業者もいるらしい。

何十年、何百年とかけて年輪を増やしてきた樹も、なくなるのは一瞬だと思うととても寂しいものだ。

巨木の魅力にみんなが気づいたら、自然も人の心も豊かになると思う。

樹の声に耳を傾けてみる、そんな「ゆとり」が必要だ。

(H)

